



Title	「記憶」と「記録」の狭間で：梅棹忠夫の戦中と戦後をめぐって
Author(s)	花森, 重行
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2004, 38, p. 25-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56536
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「記憶」と「記録」の狭間で

——梅棹忠夫の戦中と戦後をめぐって——

花 森 重 行

一、はじめに

記憶、特に太平洋戦争や植民地や外地をめぐる記憶の場合、それを語ることはしばしば大きな畏へと陥ることとなる。正しい記憶に対して間違つた記憶が対置される、もしくは正しい記憶からどれだけ距離があるかという、正義の計測へと陥る畏に、である。

例えば戦後日本の集合意識の「ねじれ」を問題にした加藤典洋「敗戦後論」(『群像』一九九五年一月号)に対する高橋哲哉の批判は、まさにその畏に陥っているといえるだろう。テッサ・モリススズキが⁽¹⁾いみじくも表現したように、日本人という地平を設定してしまうことによって、あるべき日本人が有するべき正しい記憶のあり方というものが、高橋によって設定されてしまっているのである。

あるべき正しい記憶を設定することは、過去を裁くことへとつながる。もちろん私は、中立的な立場があるとい

うことをいいたいのではない。ただ安易に歴史的限界をいい過去の思想の過ちを裁くことは、批判としてはそれほど有効とは思えないだけである。むしろその裁きを通じて、ポジショナリティーの問題を重視する多くの論者が、過去を裁く自らのポジショナリティーを不問に付すこととなってしまうように私には感じられる。

このような傾向はまた、近年の戦後の記憶をめぐる研究においても胚胎し、生み出される様々なテキスト分析を陳腐なものとしてしまっている。その陳腐さの象徴ともいべきものが、安易に持ち出される限界という言葉であり、限界という言葉を前提に論を進める小熊英二「〈民主〉と〈愛国〉 戦後日本のナシヨナリズムと公共性」(新曜社 二〇〇二)という存在である。

戦後思想におけるナシヨナリズムを主要な分析対象としつつも小熊はもちろん、それらの思想をナシヨナリスティックであるというだけで断罪することはしない。「戦後思想が「民主」や「愛国」といった「ナシヨナリズム」の言葉で表現しようと試みてきた「名前のないもの」を、言葉の表面的な相違をかきわけて受けとめ、それに現代にふさわしいかたちを与える読みかえを行なってゆくこと」⁽³⁾を小熊は目指そうとする。そのために「戦後思想の最良の部分を再現」する作業が行なわれるのである。

にもかかわらず小熊は、戦後思想を受けとめるという作業が分析者としての自らの地位を揺るがすことに不安を覚え、ところどころで自らの立場、良識的な立場を表明し、自らの立ち位置を明確化しようとする。「もちろん戦後思想は、前述したように多くの限界を抱えていた」⁽⁴⁾。「ナシヨナリズム」とよばれる現象のマイナス面を承知しているから、「ナシヨナリズム」という言葉の復権を唱える意志はない」⁽⁵⁾。あくまで良識を前提に分析を行なうのが小熊のスタンスであり、それが小熊の本が一般に受け入れられる要因をなすものであるが、良識に基づいて戦後思想を

分類・評価することが同時に、その本の最大の問題だと私には感じられる。

小熊が当初は『〈民主〉と〈愛国〉』の一章としようとしていた清水幾太郎論を独立させたことは、このような問題を象徴するものといえよう。⁽⁶⁾ 絶えず主張を変化させ、最終的に核武装までを唱えた清水は、小熊の良識に沿わなかったのである。小熊にとって扱いきれない思想家は放逐されるか、単にレッテルを貼られていくこととなり、戦後の思想空間は小熊にとって都合のよい存在のみによって構成されることとなる。その意味で「戦後思想の最良の部分」とは小熊にとって許容できる「戦後思想」の良識的部分なのであって、そこからは「谷川雁などをはじめとした「辺境」の思想や、在日韓国・朝鮮人などの思想」⁽⁷⁾は当然のように排除されるのである。⁽⁸⁾

個々の思想家の個別性を「言葉の表面的な相違」として一括し、言葉の背後にある当時の人々の「心情」を探ることを最大の目的とすることは、戦後思想を「「辺境」の思想や、在日韓国・朝鮮人などの思想」が排除された国民「心情」の単なる発露としてしまう以外の何ものではない。だがそれならば、数多くの著書を出した国民的知識人清水は何故この国民思想の枠から排除されてしまうのか。清水が小熊の国民的良識に沿わなかったからとしか説明は出来ないだろう。

小熊と異なり私にとって戦後思想を問うこととは、「戦後」の拘束を真に乗りこえること⁽⁹⁾ではない。国民的良識に基づいて戦後思想を分類し、その良識に沿った人々を「戦後思想の最良の成果」とすることでもない。むしろ小熊が一括してしまった複数のテキスト、戦後という複雑な織物のなかで生まれたテキストを、その個別性にこだわることを通じて、テキストから現在においてなお響いてくる可能性を、危険性ととも探り出していることに、私の目指す方向性がある。それは戦後の記憶の問題を、単なる過去の問題とするのではなく、現在にも続いていると割

り切ってしまうことでもない、不安定な立場に自らをたたせることとなるだろう。

おそらく小熊によつては清水と同じく一貫した思想をもたない存在として扱われるだろう思想家として、梅棹忠夫（一九二〇）をあげるのは間違ひではなからう。「民主」と「愛國」ではわずかに「文明の生態史観序説」（中央公論）一九五七年二月号、以後「序説」と略称）などが言及されているだけである。それも、五〇年代後半におけるアジア認識についての先行研究が、梅棹をはずすことの出来ない存在としてにしていることによるのだろう。⁽¹⁰⁾

にもかかわらず、マルクス主義史学を中心とした歴史学などによる先行研究においても、梅棹は、きちんと捉えられてきたとは言い難い。⁽¹¹⁾確かに梅棹は重要人物とされているが、歴史学の議論においては、梅棹に対する思想的なレッテル貼りがあつてその後に問題点を指摘する傾向が強かつたことは、否めない事実である。

確かに「史観」であり、トインビーを意識しつつ「世界史」の枠組みを描こうとした「序説」を歴史認識やアジア認識の文脈において評価することは外れてはいないにしても、それはしばし歴史学の歴史像と比較して梅棹側にかに問題性があるかをいうことを指摘するための材料とされてきた。いわば歴史学のアジア認識の正しさを証明するための材料とされてきたのである。

ある正しさに対置されることによる評価はだが、「序説」、ひいては梅棹のもつたアクチュアルな文脈を読み取れなくしてしまつたのではないだろうか。歴史認識という図式に梅棹を閉じ込めることは、梅棹のもつた可能性と危険性とを閉却してしまふとともに、今まさに保守イデオログの雰囲気を漂わせつつある梅棹ではない、もう一つの梅棹の像を描くことを不可能としてしまつていのではないだろうか。

このテキストで私は、梅棹の四〇〇六〇年代の諸テキストを同時代の文脈におきなおすことを通じて、梅棹の提

起した「思想を使う」⁽¹²⁾ということの意味を考えていきたいと思う。「思想を使う」という言葉はこの時代の梅棹のスタンスを象徴するものであり、同時に梅棹を単なる反動イデオログとして矮小化しようとする知識人たちの根拠となった言葉であった。矮小化される傾向の強かった梅棹であるが、私としては「単純に梅棹忠夫を右翼知識人に括り込もうとは思わない」⁽¹³⁾という孫歌の見解を尊重しつつ、記憶と体験、歴史、そして思想という概念が交差する文脈のなかで、梅棹のテキストのもった可能性を最大限に発掘していくことを目指したい。それは「思想を使う」という梅棹自身の言葉をそのテキストに適用していくことであるとともに、梅棹のテキストの可能性に胚胎される危険性を明らかにすることでもあるだろう。

まずは五四年に発表された梅棹のテキスト「アマチュア思想家宣言」(『思想の科学』一九五四年四月号)を再読することのなから、梅棹の可能性と危険性の森へ分け入る旅を始めることとしよう。

二、「思想を使う」ということ

「アマチュア思想家宣言」という、ごく短い文章に私が注目する理由とは何なのだろうか。梅棹自身は著書に再録することもせず、いつもは饒舌な自らの著作集解説もことその文章に対しては、淡々としたものでしかなく、梅棹自身もそれ程高くは評価していないように思われる。「アマチュア思想家宣言」を再び読み直そうとする理由とは何なのだろうか。

端的にいうならば、この文章こそが梅棹が有した可能性を抉り出す核となる存在であり、歴史認識の問題へと回収することなく「序説」を読み直す手がかりとなると思われるからである。

梅棹自身の低い評価にもかかわらず「アマチュア思想家宣言」は、『思想の科学』一九六二年五月号での再録に象徴されるように、『思想の科学』研究会においては非常に高い評価を得ている。「思想の科学の主題」という特集において再録されたことから、それが特に五〇年代以降の『思想の科学』研究会が目指した「大衆路線」⁽¹⁴⁾における、民衆からの知という方向性のなかで評価されていることは確かであろう。

この高い評価、六二年段階において与えられた高い評価を私は、もう一度五〇―六〇年代の思想の文脈のなかで考え直してみたい。「序説」などの五〇年代のテキストを、歴史認識の正しさをさぐる目盛りとしてでなく読み直していく可能性は、まさに「アマチュア思想家宣言」の方向の先にあるのであり、それを突破口とすることが、梅棹の有した批判性を最大限に評価することにつながるからである。

「アマチュア思想家宣言」が発表された五〇年代の前半は、学問、特に諸学の王というべき歴史学に対する様々な異議申立てが噴出していった。国民的歴史学運動などの歴史学内部の動きにとどまらず、様々な分野、特に生活記録運動などを通じて、間接的に行なわれていたことは、姉である鶴見和子とともに『思想の科学』研究会の中心的存在であった鶴見俊輔の言葉によっても明らかとなる。

「鶴見和子編の『鉛筆を握る主婦』（昭和二十九年）、木下順二・鶴見和子編『母の歴史』（昭和二十九年）」などの作品を、「紡績女工が自分のお母さんのことを調べるという仕方、現代史を書き直す仕事です。この仕事は、どんな人も現代史の書き直しには参加できるんだという方向を打ち出したという意味で重要だと思う」と評価する鶴見。さらに鶴見は、森伊佐雄『昭和に生きる』（五七）を、「遠山茂樹その他の歴研の人たちの書いた『昭和史』や『日本近代史』の裏返しとなるような仕事」であるとして評価しようとする。⁽¹⁶⁾

既存のアカデミズムを批判し、民衆からの知の可能性を探ろうとするため『思想の科学』研究会を組織した鶴見俊輔にとつて、歴史とは既存の歴史学が一方的に提供するものであつてはいけなかつた。「どんな人も現代史の書き直しには参加できる」という方向を、「どんな人」も歴史の「書き直しには参加できる」という方向へと転換させることが必要とされたのである。

この鶴見の発言自体は五五年の日本共産党の第六回全国協議会による路線転換、五六年に日本にも伝播するスターリン批判、同じく五六年の『昭和史』論争以後の言葉であるが、五〇年代前半の生活記録運動などにおける歴史叙述の試みが、アカデミズムへの一定の批判となつていたことは確かであろう。代表的なマルクス主義歴史学者である石母田正の言葉を超えて国民的歴史学運動が歴史学批判へと向かつていったようにである。

五〇年代前半には梅棹自身も『思想の科学』研究会の一員として参加し、研究会の手になる『人間科学の事典』（河出書房 一九五一）に積極的に関わり、生態学関係の多くの部分を執筆した。また研究会のメンバーとも重なる大衆文化研究グループによる「大衆小説研究の一つの試み——『宮本武蔵』は読者にどう受けとられるか——」（『思想』一九五一年八月号）にも参加することとなつていった。

『人間科学の事典』が「最近の英、米、諸国において発展した近代理論、あるいは統一化学の理論⁽¹⁹⁾」を中心とした人間科学を、単に紹介するのではなく、「今一度、血肉のある人間の中を通過⁽²⁰⁾」させていくものだったことは、後に強まる知を民衆のものへとという方向性の萌芽を窺うことができよう。また大衆文化を独立した文化として評価する道を切り開いていった吉川英治『宮本武蔵』の読者分析の作業はまた、民衆を、受動的な存在としてではなく絶えず声を発している存在として受け止め直そうとするものであり、その意味で大衆文化の再評価という作業も、鶴

見が評価した生活記録運動などつながるものであったといえよう。⁽²¹⁾そしてこの延長線上に、「アマチュア思想家宣言」は生まれるのである。

「アマチュア思想家宣言」の目指すこと、それは「思想は使うべきものである」⁽²²⁾と主張することにあつた。思想を単なる道具に墮するようにもみえるその言葉の背景には、思想が思想界の専門家に独占されているということに對する梅棹なりの反発が存在していたのである。

「このごろ思想を論ずるのがはやっているが(…)読んでわかるのは、おそらく少数の——日本ではあんがい多数かもしれないが——プロ思想家だけではないかと思ひます。しろうとにはさっぱりわからない」。市中に回つてゐる「思想書」が専門家を対象とした「思想学の専門書」でなく「一般の人間に、思想をあたえようとしてい」ながらも、結局それが「プロ入門」にしかなつていない。「読んでわからぬのは、読み方がわるいのではなくて、はじめからわからぬようにできている」⁽²³⁾というのである。

そもそも専門の思想家は自らの存在を特別視がちだが、思想を論ずるにしても「幾人かの人々を感動させ、なつとくさす」ということが基本にあるのは間違ひない。「感動やなつとくの仕方というものは、じつにいろいろあるもので」あつて、それを他派と種別化するために「何々思想、何々主義」という「ラベル」が貼られている。その意味で思想界も他の世界と類似の構造をもつていたのであり、思想界が、「一般の人々」を対象としながらも「業者とマニア」によつて支えられているという産業としての現実を隠蔽していることを指摘することで梅棹は、戦後の思想界に内在する権威主義的な要素を抉り出そうとする。⁽²⁴⁾

その上で梅棹が思想の先に設定するのが、「生活」という概念である。日本の思想界においてはとかく思想を体系

的に語る事が優先されているが、梅棹は次のように断言する。「われわれの生活もまたそういうもので、思想の本を読んでちよつとわからんでも、生きてゆくのに差し支へはない、生活というものは、そんな本を読まんでも、どうやら成り立つようにはできている」⁽²⁵⁾のではないかと。

こう言い切るに値する確信が、梅棹にはあつた。「思想は決して全てではない。その中で、すべてが処理されてしまふのではない。現実の社会における現実の人間の生活と、いろいろの点で、かかわりがある。体系ということを言うならば、思想は、生活という大きな体系の中の一要素」だという確信である。⁽²⁶⁾

もちろん梅棹自身も断っているように、生活に「役に立たぬと言っているのは思想の本、思想の雑誌のことなのであつて、思想そのもの」⁽²⁷⁾ではない。むしろ梅棹が目指すのは、思想をどのように使うのかということにあつた。

「そもそも思想のこなし方には二種類ある。一つは、思想を論ずる。もう一つは、思想を使う」ことだと梅棹は思想への向きあい方を区分けする。「プロの思想家」に担われる「思想を論ずる」という作業、それは体系的に「考えをのべること」、「考えを考えたとして語り、紹介し、批評すること」である。もちろん体系的に考えることが悪いわけではない。だが「西洋の思想をその体系のまま日本へ移植」、もしくはもつと隠微に適用しようとする傾向のなかでは、「プロの思想家たちには、土民の生活よりも思想の体系を保つ方が重大なかもしれない」との梅棹の危惧は、現実味を帯びざるをえない。⁽²⁸⁾

西洋思想を体系的に受け入れることを絶対的な命題とする当時の思想界に潜在する西洋文明崇拜の傾向が、オリエンタリズム的な視点を内在化することへとつながり、非文明とされた地域をステレオタイプの枠内に収めてしまふのに対して梅棹は、非文明からの抵抗の可能性を探ろうとする。梅棹いうところの「土民」が、文明を逆用する

ことよつて西洋に抵抗しようとする端緒を探ろうとするのである。

「ハイヒールで思い出したが、興安嶺の森の中を、トナカイをひっぱつて歩いているオロチョン娘が、ちゃんとハイヒールをもつていた。ネパールの山の中の村に、プラスチックの腕輪を売っているそうです。チベット人の汚い天幕にカメラを向けたら、こんどは天幕の中からカメラをもつたチベット人が出てきてこちらをうつつしたそうです。非西洋²⁹未開とみなす視点からは発見できない、複雑化された文化の交錯の場面から梅棹は、非西洋の人々が思想、ひいては文明を使い、それを抵抗へとつなげていく可能性を探ろうとする。

「土民には土性骨がある。これが植民地化に抵抗する」のであり、フランスなどの「レジスタンスなどというところに、かんとんにとびつく」ことが抵抗になるのではない。むしろ思想、そして文明を分解して「体系の外」へ取り出し、「土民」の「新たな体系」に組み入れ、「いろいろ修正されて変形される」なかで、それは抵抗の道具となつていくのである。「古今東西の思想が断片的にたくさんつまつて、いろいろな場合に応じて、いろんなものが発動」する能力をもつ「土民」には、その組換えを行なうことが出来るといふのである。フランスの「レジスタンス」などの西洋の抵抗の形を絶対化し、それを日本に当てはめていこうとする日本の思想界に内在するオリエンタリズムが、「土民」の抵抗のあり方を見えないものとしてしまつてしまつてゐることへの批判を、そこからうかがうことが出来る。

日本の思想界への批判から、思想の利用の可能性、そしてそれを植民地化への抵抗にまで活かしていこうとする梅棹の議論。わずかの字数のなかに詰め込まれた盛り沢山の内容、それらが「アマチュア思想家」である梅棹によつて組みかえられ接続されているテキストとして「アマチュア思想家宣言」はあつた。権威と化した思想を拒否し、

思想を使っていく方法、さらにはそれを抵抗へとつなげていく方法がそこでは提出されているのであり、「アマチュア」としての民衆にとつて、アカデミズムの鎖を断ちつつ自らの言葉を構築していかうとする姿勢がそのテクストには現われている。既存のアカデミズムに対するこの痛烈な批判こそ、『思想の科学』研究会が、そして鶴見たちが梅棹に求めたものだったのであり、「アマチュア思想家宣言」はその要求に応え得る、五〇〜六〇年代における知の可能性を代表する論文だったといえよう。⁽³¹⁾

アカデミズムが思想を占有している現状を批判し、民衆が思想を能動的に使っていく方法を模索しようとした「アマチュア思想家宣言」。それは著作に再録されなかつたように、梅棹自身によつても忘れられることとなるが、「思想を使う」という発想自体はその後も終わることはなかつた。かなりねじれた形で、情報化社会に生きる個人が情報を自ら発信していく方法を模索しようとした六九年の『知的生産の技術』（岩波書店）へとつながるものでもあったといえよう。

以上のような梅棹のアカデミズム批判はだが、五〇年代において突如始まったものではない。その震源は一〇年以上前の戦前戦中の様々な体験へとさかのぼっていくこととなる。単純にある体験があつたことがその未来を規定するわけではない。だが体験は状況のなかで語り直されていくなかで再び生き直されていくものでもあり、この往還関係こそ私の注目したいところである。次に梅棹において、震源としての戦前戦中の体験と戦後の体験とがどのように交差していくのかをみていくこととしよう。それこそが「序説」をきちんと読み解くための準備レッスンとなるだろう。

三、歴史の批判／行動のために歴史

「思想を使うという場合(…)思想は行動にかかわりをもつてくる」⁽³²⁾。「アマチュア思想家宣言」においてこう断言した梅棹にとって、思想の方法の一つとしてある歴史的思考とは、やはり行動に関わりをもたなければならなかったことはいまでもない。

その場合の行動は漠然たる行動ではなく、組織化された特定の行動ということが想定されていた。梅棹にとってそれは、戦前以来数多く行なった探検が想定されていたのであり、それら体験のなかで梅棹は、「思想と行動」とのかかわりを発見していくこととなっていくのである。梅棹が探検にどのように出会い、そのなかで何を発見していたのか。次にこの点を、今西錦司などとの関係を通じてみていくこととしたい。

梅棹と探検との出会いは、戦争というものを媒介せずに論じることが不可能なものであった。むしろ戦争がなかったならば、梅棹が探検にあればどこまでのめりこんだかということとは疑問が残る。「大きな変動がなかったら、わたしはこんな追及(数々の探検——引用者)を試みようとはしなかった」と率直に述べた「アジア意識と近代化」⁽³⁴⁾。「芽」八号 一九五三年七月)に明らかかなように梅棹にとって、探検と戦争とは不可分なものであった。

梅棹を数々の探検へと誘った京都探検地理学会が、日本の大陸そして南方への侵略に対して、「之が実現の為力を致し、学術の進歩と国運の発展を助長すべき義務を感じる」⁽³³⁾ことを趣旨に掲げていることにも、探検と戦争との距離の近さを感じ取ることができるだろう。「本会は互ひに協力して学術探検を行ひ、資源調査をなさんと志す一騎当千の人達によつて組織されてゐる」⁽³⁴⁾のだとの今西錦司の言葉から、その関係はむしろ強固なものだったことがわか

る。探検と戦争との関係は、切っても切り離せないものだったのである。

梅棹を積極的に戦争協力した「右翼知識人」とみなす意見は、例えば梅棹の「探検と地政学」(『探検』四号 一九四三年一〇月)を文面のみ読むならば、妥当なもののように思える。そこからは極端なまでに戦争協力的な梅棹の像をうかがうことができるし、この文章が梅棹の著作集に収録されていないことに梅棹を守ろうとする周囲の政治的意図を感じることもできよう。⁽³⁵⁾

「近世欧羅巴的世界の世界制覇、世界植民地化の先駆運動」としての「探検」の廃止を主張する地政学者小牧實繁に対して、あくまで「独立せる主体的行為」として探検の意義を強調するなかで梅棹は、積極的に探検を侵略と結びつけようとしているように見える。⁽³⁶⁾「最も未開な地域における諸種の事業(…)の着手される以前に、何の事業が行はれるべきであるか(…)、如何なる方針をもつてその土地に向ふべきであるか」を考える「総合的、基礎的な科学的根拠を与へる仕事」に探検の意義を求めようとする梅棹が確かにそこにはいる。⁽³⁷⁾⁽³⁸⁾

例えば文献資料に頼る従来の歴史研究が「歴史が存在せぬ土地」として放逐してきた大東亜共栄圏下の、「今後とれだけの価値を生ずるかわからぬ未開の土地」を引き合いに出しつつ、梅棹は探検の重要性について述べる。これらの土地を有効に「開発」し「偉大な生産力をもつた土地に改編」するために必要なのが、「実証精神」に基づいた、「日本の主体的行為」としての探検だと梅棹は主張するのである。⁽³⁹⁾

だが梅棹にとり、戦争への協力とはそれほど重要なことではなかった。「此所(白頭山―引用者)に限らず満領にはブランク地帯が多い。未知を渴望し、発見にこそ喜びを見出す私達である」。⁽⁴⁰⁾一九四一年のこの言葉からうかがわれるのは、「未知を渴望し、発見にこそ喜びを見出」そうとする態度である。既に日中戦争は泥沼状態に入っていた

この時期、満州の抗日ゲリラなどとの遭遇という危険を犯してまでも梅棹たちが探検を行なおうとしたのは、「未知」の土地を踏破し、「ブランク地帯」を地図に記そうとする欲望に基づいたものだったのである。⁽⁴¹⁾

それゆえここで問題とされるべきは、文面だけの梅棹の戦争協力的姿勢ではない。真に問題とされるべきは、探検を残すためには戦争協力的な言動も言ってしまう梅棹の探検へのこだわりであるはずである。ここまで梅棹が探検という行動にこだわる理由であるはずである。

第三高等学校時代には山岳部・京都探検地理学会に所属し、白頭山に登頂（四〇）、また京都探検地理学会樺太踏査隊に参加（四〇）。京都帝国大学入学後も京都探検地理学会ボナペ島調査隊に加わり（四一）、北部大興安嶺探検隊に同伴（四二）するという数多くの探検体験が梅棹にもたらしたもので、それが近代であった。そしてこの近代を求める旅へ梅棹を誘った存在こそが今西錦司であった。

例えば京都帝国大学山岳部がはじめて近代的探検法を本格的に導入した三四～五年の白頭山登山について、今西は次のように述べる。「われわれはみな白頭山へ来てよかったと思った」。この満足感には、「単なる自然鑑賞や、山岳征服感」という前近代的なものではなく、「小さいながらも、エキスペディションという一つの登山形式を通して求められた白頭山にして、はじめて与えることのできた満足」であった。⁽⁴²⁾「エキスペディション」という近代的な方法こそが、このような満足を与えるのであり、近代的方法こそが、さらに広い地域へと向うことを助けることとなるのである。

登山、そして探検という方法をとるとき必要となる近代的方法。さらにヒマラヤ登頂などをも目指そうとするとき、もはやそれは個人的プレーではなく、チームに基づく行動、「極端に言えば人界を遠く隔たった高山に、数週間

にわたる困難な登攀を試みようとするには、そのチーム自身が一つの小社会として完成している必要がある⁽⁴³⁾のである。

このチームには、様々な人々が参加しており、各人の目指すところは、「ある者はその冬季初登頂を第一に考え、またある者は酷寒に対する諸研究を、また他のある者は輸送、人夫の操縦など遠征登山の根本問題を重要視するといった個人的差異はあった」。にもかかわらず「遠征隊全体としての目的を考えると、これらの諸項はすべてその中に含まれ」るべきなのである。そして「遠征隊という形式のもとに、白頭山を対象として終始統制ある活動をなしえたのであるならば、隊員の分担任務のいかんを超えて、そこに各人の能力の総和の上に、なおプラス・アルファとして現わさるべきもの」が生まれることとなる。「単なる娯楽としての、趣味としての、あるいはスポーツとしての山登りを超越」した、「人類としての仕事」の達成は、このような近代的方法によってのみ可能となるのである⁽⁴⁴⁾。

「人類としての仕事」としての「遠征」⁽⁴⁵⁾「探検」を行ない未知の領野を征服することを目指す今西にとって、障害となるのがチーム内の「セクシヨナリズム」であった。そのような「封建的な考え」を撤廃し、「各方面のスペシャリストが有機的につながり、登山界全体が一つの大きな、強力な有機体として、更生すること」が必要なのである。「そしてそのためには登山界という一つの有機体の頭脳となり、社会として見ればその統制機関となるべき組織の存在を必要とする」と今西は主張する⁽⁴⁶⁾。

探検における近代組織や近代的登山術を通じて今西は近代に出会ったのであり、その今西が将来性を期待した「青年学徒」の一人こそが梅棹であった⁽⁴⁷⁾。今西と同じく梅棹も「隊員の選択、構成、隊の編成」、「天測」などの様々な

「探検技術」を通じて近代と出会うこととなった。だが梅棹において近代は、探検という場を飛び越えさらに広い領域において適用されることとなる。探検において「能率」⁽⁴⁹⁾というものが重視されたのと同じように、梅棹の場合は戦後の生活においてこの「能率」という基準が適用され、それが生活改善の契機となっていくのである。

「伝統的習慣よりも便利な方をとろう」という精神が近代的⁽⁵⁰⁾であるとす梅棹にとって戦後直後の物資不足の時代とは、「生活を合理主義が支配するようになった」⁽⁵¹⁾時期であった。それ故梅棹は「こういいます。『戦争はわたしに生活における合理主義をおしえたのです』と。探検における組織内の封建的側面、諸組織の伝統ともいべきものが合理性の名のもとに排除の対象となっていたのと同様に、梅棹にとっては『生活』の合理化の名のもとに、『ファミリ・カルチュアに沈着している何百年の下らないカス』⁽⁵¹⁾が排除されるのである。

このときの封建的側面とは、日常生活のなかに地層のように堆積している歴史であった。その歴史とは大文字の歴史ではない。しいていうならば鶴見和子などのプラグマティズム理解のなかで「個人歴史性」という概念によって捉えられた「習慣」などの要素であり、⁽⁵²⁾それは個人を中心として「生活」を捉える梅棹にとって排除されるべき障害物と当初は映ったのである。

だが梅棹はいざそれを排除した後すぐ個人史も大文字の歴史にも還元できない小文字の歴史の喪失を嘆き、「わたしは近代化しすぎました」⁽⁵³⁾と吐露する。この小文字の歴史こそが「土民」にとつての抵抗の根拠となるものでもあったのであり、大文字の歴史によっては対象化され得なかつたこの側面こそ、「アマチュア思想家宣言」において強調されたものだったからである。その意味で梅棹の歴史とは、「近代化」での喪失を経て再発見されたものでもあったのである。

「史観」としての「序説」についても、単に歴史学の方法に基づく歴史記述としてでなく、「個人歴史性」を含んだ歴史の側面から評価されなければならない。「はげしい変転の時代」のなかで「社会の一齣」として生きている人々が、生きるために行なう様々な「工夫」、例えば「お掃除をどうやったらのしく出来るか」というような工夫」を含んだ「その人たちの歴史」。「一人一人の人」の「生き方」を書き、討論することを通じて、個々人が「新しい人間」として生まれかわることが出来るか、そしてその姿をどうしたらよいか」の「新しい途」を発見しようとする過程としての「歴史」の観点から、である。⁽⁵⁴⁾ でなければ、歴史とは既存の歴史学が一方的に提供するものではなく、「どんな人」も歴史の「書き直しには参加できる」という方向を目指していた鶴見俊輔や、⁽⁵⁵⁾ 「思想の科学」研究会に深く関わった竹内好が梅棹の「序説」を高く評価している理由も明らかとならない。

両者のうち特に竹内は「二つのアジア史観——梅棹説と竹山説」(『東京新聞』八月一日〜七日)で、「序説」を高く評価する。「梅棹説のなかには、反共に利用されるものが本来的にふくまれている」ことを一応は踏まえつつも竹内は、それが権威と化した歴史学にもった批判性をこそ評価しようとするのである。⁽⁵⁶⁾

「梅棹説」を反共色の強い竹山道雄「日本文化の位置」(『新潮』一九五七年五月号)の議論と比較しつつ竹内は、両者が「日本と西欧とが、歴史発展の型として同質であることを認める点で一致しているが、その発想の動機、理論家の方法、および内容はかなりちがう。なによりも歴史意識が根本的にちがっている」⁽⁵⁷⁾ ことを指摘する。例えば竹山だけでなくマルクス主義史学の世界史像においてもあまり重視されていなかったイスラム世界を梅棹が独自の世界として評価し得ていることは、やはり見失われるべきではない差異としてあるだろう。京都大学カラコルム・ヒンズークシ探検隊への参加で得た実感が、その視点を可能にしているのであろう。おそらくそのような点をも含

めて竹内は「序説」を、規範として迫ってくるマルクス主義史学に対する批判、竹内自身の言葉でいけば歴史の「ゼロ化」⁽⁵⁸⁾としての役割を果たしたと高く評価するのである。

遠山茂樹に代表されるマルクス主義史学が、歴史を克服されるべき「重苦しい所与」として捉えていることに対して歴史を、新しいコミュニケーションの場の創造に資する、「可塑的な、分解可能な構築物」として捉えようとする竹内だからこそ出来た評価ともいえよう。⁽⁵⁹⁾ 諸学の王としての歴史学が、マルクス主義と結合することによってさらに権威を帯び、歴史学の専門研究者以外にはただ与えられるだけの所与としてしかないような状況を批判するという意味で、「序説」⁽⁶⁰⁾がもった意味は大きかった。

このように考えていくとき「序説」は、既存の大文字の歴史のように所与の存在として迫ってくるのではなく、行動と思想との絶えざる往還運動のなかで批判され続けていく過程として歴史を考えようとするものだったといえよう。そもそも「序説」自体が梅棹の長年のフィールドワークと理論化との往還運動のなかから生まれてきたものだったのである。この永続する往還運動の最初の一步としての「序説」とは、あくまで「デッサンの第一号」⁽⁶¹⁾という仮説でしかなかったたのであり、逆に「デッサン」であるが故に、竹山などの「アマチュア」歴史家が歴史を論じる様々な道具として、利用されることにもなる。

一方では「生活」の「能率」化の伴う排除のなかで逆説的に小文字の歴史が発見され、一方では「生活」と切り離された大文字の歴史が否定される。この矛盾のなかに「序説」は存在していたのであり、それが広く受け入れられたのは、高い経済成長率が続く現在の日本を肯定するという側面だけでは決してなかった。堀田善衛は、日本を西欧と併行進化の関係にあるという梅棹の「序説」を、「外国人に説明するのに工合にも出来」ていて、「われわ

れの奇妙な虚栄心をくすぐる」だけでなく、「結果的には、西欧自由主義陣営と称されるものに属しているについて、それを文化史的に正当化」していると評する。⁽⁶²⁾ 高度経済成長以後の時代から見れば確かにそれは結果としては正しいのだが、⁽⁶³⁾ 竹山と梅棹を一括していることにも現われているように、梅棹の方法にまで迫ったものであったとはいえない。⁽⁶⁴⁾ これまでみてきたようにむしろ、テキストの表面に現われる思想よりも、その思想を扱う梅棹の方法こそ真の問題があつたのである。技術ともいふべきこの方法に対して、単純に善悪の結論をつけることはできない。むしろ方法という一見価値中立的なものであるがゆえにそれ程は注目されなかつたその方法と思想との絡み合いを検討することを通じて、梅棹の問題性を探っていくことが必要なのである。

次に梅棹が研究の方法を提示した書物である『知的生産の技術』を中心として、梅棹の可能性をはらんだ問題性のありかを、一つのスケッチとして描いていきたいと思う。

四、「記憶」と「記録」の狭間で

『思想の科学』研究会などの文脈のなかで読み解くとき、五〇年代の梅棹のテキストとは、既存の学問体制を批判し、民衆が思想を使い歴史を語るきっかけを与えていくものであつたいえよう。既に見てきたように、単純に梅棹をイデオロギー的に論断することはそれほど意味があるとも思われない。むしろ問題は、危険性と絡み合った可能性を、読み解いていくことにある。

六〇年代以降の梅棹に関しては、厳しい評価が存在する。日本文化論の代表的存在とする意見もあり、大阪万博のプランナーとなり国立民族学博物館の設立の中心になつたことでもますます深まった政府関係者との人脈は、現在

に続く保守的知識人梅棹の相貌の始まりかもしれない。

とはいえ梅棹の可能性は五〇年代だけで終わってしまったようにも思われないし、それ以後の梅棹を単純な意味での転向として捉えるのには、無理があるように思われる。だが冒頭で述べたように現在の梅棹が保守知識人となつているように見えるのも事実である。

このことをどのように考えればいいのか。むしろ私としては、梅棹の方法の変遷のなかに、その問題性が立ち現われてくる姿を見てみたいと思う。戦中の体験と交錯するなかで、梅棹が提示しようとした方法の問題がどのように変容していったのか。次に六九年の『知的生産の技術』（岩波書店）を中心にみていきたいと思う。

「大量の情報」が溢れている情報社会のなかで、「研究者、学生、文筆業者、あるいはひろく情報産業従事者」という範囲を超えた「ひとびと」が、「情報をえて、整理し、かんがえ、結論をだし、他の個人にそれを伝達し、行動する」ことを可能にするにはどうすればいいか。⁽⁶⁵⁾『知的生産の技術』のこのような問題意識には、確かに「アマチュア思想家宣言」とのつながりをみるができる。

にもかかわらず「アマチュア思想家宣言」が文明の逆用を、植民地化への「土民」の抵抗に結び付けようとしたのに対して『知的生産の技術』はあくまで、既存の社会を前提として論を進めている。今後一層進むであろう情報化のなかで変容する社会を前提する筆の下では、もはや植民地化など大した問題ではないかのようには。

もちろん梅棹は「組織の目標に個人がいかに適応するかをさぐる」というのではない。「情報の時代における個人のありかたを十分にかんがえておかないと、組織の敷設した合理主義の路線を、個人はただひたすらにはしられない、ということにもなりかねない」ことを危惧し、「あたらしい時代における、個人の知的武装の必要」を強調し

ようにするのである。⁽⁶⁶⁾

表題にもあるように梅棹は「技術」の重要性を強調し、その「技術」を組織に対して有効に活用していくことを目指している。梅棹自身は「知的生産の技術」は企業や官庁の組織を対象としたものではないと強調するが、実際の「技術」は企業や官庁において注目されることとなるのも事実である。⁽⁶⁷⁾ だが梅棹が組織を能率的に運営し改革し得る主体的な個人を作り出すことを目指していたと結論付けるのは、あまりに性急過ぎる結論であろう。

戦前以来の梅棹の友人である川喜田二郎が発案したKJ法などに限らず、今西を中心に探検を行なった人びとは、方法というものを重視していた。そこには今西が組織した近代的な方法に基づく探検とそこにおける組織論が色濃い影を落としている。その梅棹の方法の中心にあったのが、カード法だったのである。

もちろん梅棹のカード法は戦中の探検を通じてのみ生み出されたものでなかった。⁽⁶⁸⁾ 京大カード自体は、直接は戦後の京都大学人文科学研究所の桑原武夫との共同研究のなかで生み出されたものであったが、カードによる記録という発想自体は梅棹独自のものであった。

戦争中に研究していたモンゴルの遊牧民の大量の「調査資料」を梅棹は敗戦後、日本にもちかえてきた。「ちょいちよいと頁をめくって結論」をまとめるには「材料が豊富」過ぎる「ぎしりかきこんだ数十冊の野帳をまえにして、さて、これをどう処理しようかと思案」した梅棹は、「この資料全部を項目にばらして、カードにしてしまうという方法」を思いついた。そして「それを基礎」にして、「モンゴル遊牧民についての論文」を書くこととなるのである。⁽⁶⁹⁾

「野帳の内容を、ひとつひとつ項目」にばらし写し取ることによって生み出された「数千枚のカード」。だがその

変換過程のなかで、一体何が失われていったのだろうか。⁽⁷⁰⁾

「カードはコンピュータにしている」とする梅棹は、両者が「人間のかわりに機械が記憶」する「装置」であり「忘却の装置」であるとする。⁽⁷¹⁾だが梅棹は機械による「記憶」を「記録」とみなす。つまり「記憶」と「記録」とを区別しているのであう。その上で「ものごとは、記憶せずに記録する。はじめから、記憶しようという努力はあきらめて、なるだけこまめに記録をとることに努力する」べきことを主張する。⁽⁷²⁾

「記録」化と「忘却」とは梅棹にとって表裏一体のものであった。だがそこからはなになが「忘却」されるのだろうか。

例えば梅棹の方法からは戦争の記憶が忘却されているということもできよう。六四年、『知的生産の技術』のもとになる連載が始まる一年前、梅棹は『東南アジア紀行』のなかで次のようなエピソードを記す。⁽⁷³⁾藤岡喜愛とともにタイのメー・ホーイ村を訪れた梅棹は、「人類学者であり、いわゆるロールシャハラ」である藤岡とともに「ロールシャハ・テストを用いて、各民族のパースナリティを研究」しようとする。

「終戦のまえ、メー・ホーイの村にふたりの日本兵が逃げてきた。ビルマの方から、ドーイ・インタノンの山群をこえて、ここまでたどりついたのであった。しかし、メー・ホーイの村で、マラリアにかかって、ふたりとも死んだ。村の人たちは、外国人が来ても、目につかぬように、こっそりとほうむってやった……」との逸話を長老から聞いていた梅棹は、だがその件を調べようとはしない。「わたしがくわしく調べる機会を失ったということの裏には、この問題にあまり深入りしたくない、という気持」もあつたと梅棹は告白する。「これから、パースナリティのテストなどという、かなり微妙な調査をやらなければならないのだ。そのまえに、へたに波風をたてたくないと思つた

のである⁽⁷⁴⁾と。

五七年におけるタイでの出来事を記す梅棹の筆からは、戦争の問題に固執することが探検の障害となるとする意識をうかがうこともできよう。これは戦争の忘却といふべき事態である。にもかかわらず梅棹を反動イデオログとして切り捨てていくことには、私はいささかのためらいを覚える。

例えば梅棹が『知的生産の技術』のもとになった連載を始めた同じ月、高橋和巳のエッセイが『凶書』の同じ号に載っている。「精神の網」と題されたそのエッセイで高橋は、「精神にもおそらく、たまたま役立つ網目の背後に広大な無駄の部分が必要なのであつて、あまりにカード式に整理されすぎた精神はかえつて不毛となるだろう」と主張していた。⁽⁷⁵⁾

見事すぎるほどにタイミングのよい例ゆえにかえつて使いにくいのか、少し苦笑いを浮かべながら引用する梅棹の姿を想像できるのだが、そこで梅棹は、高橋たちが「カード」を忌避する原因を「有限への恐怖」として説明しようとする。「無限の世界とのつながりを心のささえ」にしている私たちにとって、「カードは、その幻想をこわしてしまふのである」。「無限にゆたかであるはずの、わたしたちの知識や思想を、貧弱な物量の形にかえて、われわれの目のまえにつきつけてしまふのである」と。⁽⁷⁶⁾

個人の記憶の強調は、ともすれば記憶を個人の占有物にしてしまふ傾向がある。特に文学者においては、近代的自我という枠組みを設定することによって、記憶が近代的自我内部の問題とされてしまふ危険性を持つものであつたことは、否定できない事実である。この近代的自我という内部に「記憶」を閉じ込めてしまふ傾向を批判する意味で、徹底的な「記録」を対置することに意味はあつたように思われる。

同様のことは戦争の記憶をめぐる議論においても言うことができる。記憶、特に太平洋戦争の記憶を、ひいては中国を中心とするアジアとの関わりをめぐる記憶をめぐる様々に議論が繰り広げられたのである。

五〇年代後半から始まったその議論は、単に戦争の記憶を大事にすることで、体験を個人の閉じ込めていくことを提唱して終わるものではなかった。久野収・鶴見俊輔・藤田省三「戦争体験から何を汲み取ったか」〔中央公論〕一九五八年一二月号）だけでなく日高六郎などによっても、「戦争の記憶をもたない世代、戦争によって心に傷をうけなかった世代が増えつつある」⁽⁷⁷⁾ことが危惧されていたのである。⁽⁷⁸⁾

戦争体験の風化はもはや止めることは出来ない。⁽⁷⁹⁾そのなかで体験を、どのように語り継いでいくのかが問題となったのであり、体験の語り直しの道を探ろうとしたのが、梅棹を高く評価した竹内好であった。

例えば竹内は、権威主義的な歴史叙述を批判しながら、体験を個人のものとして絶対化しようとしてもしない。「日本から何百万の兵隊が行っていますが（…）このひとたちが何を見たかという点、何も見ていない。（…）自分のほうに問題がなくて、ただ行っただけで、何も見えるものではない」⁽⁸⁰⁾。「体験に埋没している体験は、真の体験ではない」のである。これを「真の体験」へと昇華するためには、「戦争体験を戦後体験と重ねあわせて処理するという方法」がとられなければならない。「戦争体験を戦後体験と重ねあわせて処理する」という、「記録」と「記憶」の往還運動というべき作業こそ必要とされたのである。

確かに往還運動という点については『知的生産の技術』は薄いといわざるをえない。だが一旦「記録」という体裁をとることが、「記憶」をめぐるまた新たな語りの出発点となるのもまた、竹内たちの主張することであった。

「記録」をめぐる問題はまた、梅棹が中心となって設立された国立民族学博物館（以下民博と略称）についても

いえることである。むしろ梅棹は、この『知的生産の技術』と民博とを対となる補完物としてみようとしていたともいうことができる。

民博の設立準備に伴う多忙さのため、『知的生産の技術』の続編の連載を中断せざるをえなかった七三年、その連載が「尻きれトンボ」になっていることの「いいわけ」のためにおこなった講演「民族学と博物館」は、まさにこの二つが不可分の存在であったことを示している。「きわめてたかい知的水準に達した今日の国民大衆」⁽⁸²⁾の知的欲求に応え、その人々が発信する情報の基礎として民族学博物館の意義を強調する梅棹にとって、同じく情報化社会のなかでの市民の能動的な情報発信の方法を説いた『知的生産の技術』とは、補完的關係にある二つの存在ということができるだろう。同時に民博は、知識を集積し、分類し分析することを通じて、「日本の政治、経済、外交に対して有益な情報」を提供できる地域研究のセンターとしても構想されたのである。梅棹においてそのことは、市民を対象とする『知的生産の技術』の延長線上にある民博という姿と背反するものでは決してなかった。⁽⁸³⁾不特定多数の市民が利用できるためにはその情報は徹底的な「記録」化を経る必要があるものであり、「記録」化された情報は、市民においても政府においても等価なものとして存在しているからである。むしろ市民の情報発信の障害を排除するためならば、官僚機構や経済界とのつながりを強めることにも決して躊躇しないのが梅棹の流儀であった。⁽⁸⁴⁾

梅棹の政策とのつながりについては、既に戦中の「探検と地政学」に現われている。そこで梅棹は、文献資料に頼る従来の歴史研究、「政治史あるひは文化史」を主要な対象とする歴史研究は、「文献的資料が歴史的叙述を可能ならしめ得るほど豊富な地域」のみを対象とし、それ以外の地域を人間の「歴史が存在せぬ地域」として放逐していると批判する。そして「歴史が存在せぬ土地」を有効に「開発」するための方法として探検の重要性を説くので

ある。⁽⁸⁵⁾

侵略に与する御用学者という像すら浮かび上がるかもしれない部分ではあるが、現実において梅棹が政策に関与できる可能性は殆んどなかった。確かに探検には軍の協力が不可欠ではあったが、そのことはただちに探検が現実の政策に関与できることを意味しなかった。だからこそ梅棹は声高に、探検と政策との結び付きを主張しようとしたのである。むしろ問われるべきは、戦後の梅棹の行動にあるだろう。

五五年のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊が記録映画『カラコルム』の制作に協力するとともに新聞に数多くの記事を提供することは、後のジャーナリズムとの深い関わりを生むこととなる。五九年には梅棹自身が朝日放送の番組審議会の委員を務め、それは「情報産業論」(『放送朝日』一九六三年一月号、後に同年三月の『中央公論』に転載)を嚆矢とする情報論という新たなフィールドを提供するだけでなく、梅棹を大阪万博のプランナーへと導くこととなる。⁽⁸⁶⁾最終的には、当時の首相である佐藤栄作の万国博開催演説原稿を代筆することにもなるのである。⁽⁸⁷⁾

この経歴こそ梅棹が国立民族学博物館設立の中心メンバーとなることを可能としたのである。

このことはただ梅棹が状況に流されていったということではない。むしろそこには、戦中は果たせなかった政策への関与を、積極的に進めていこうという姿勢すら見える。

「序説」が発表された五七年、「まだ未開拓の東南アジアすなわちカンボジア・ビルマ・カンボジア・インドネシア」に既に進出している日本の企業と「コネクション」を築いていくことが、東南アジア探検の未来を明るくすると梅棹は述べる。⁽⁸⁸⁾だが六〇年代、探検を通じて政策への関与を強めるにつれ梅棹は、企業や政府などとの関わりを深めていくのである。日本企業が進出した地域をよりうまく開発するために人類学がいかに関与つかということが

語られるのであり、その貢献のための中心拠点として民博の設立が位置づけられていたことも否めない事実である。⁽⁸⁹⁾

だが同時に梅棹が民博を「あたらしいタイプの「市民運動」⁽⁹⁰⁾」として捉えていたこともまた事実であり、そのなかからは梅棹が目指した「文化の国際交流」の前提としての「国民文化」研究⁽⁹¹⁾を批判する、新たな研究の枠組みが生まれてきてもいる。「記録」化の徹底は、「記録」化という作業そのものの不可能性を指し示すようにもなっている。「カードは精神を不毛にするかどうか、やってみたうえでのことだ」⁽⁹²⁾との梅棹の言葉が、今まさに試されようとしているのである。そしてその只中で、あれか／これかの二者択一でない方向性が私たちには求められているのである。

五、終わりに

梅棹忠夫という存在をどのようにとらえるか。この命題はおそらく、思想をどのように捉えるという命題と同じものであろう。例えば小熊のように思想を、個人の思想家によって文字として書かれた過去の資料としてのみ扱うならば、梅棹とは全く陳腐で相手にする価値もない存在としてしか浮かび上がってこない。文字と文字、テキストとテキストとの間隙にある、言葉にされなかったものを、国民感情などとしてではなく浮かび上がらせることができなければ、おそらく永久に梅棹という存在は放置されることとなる。そこからは高度経済成長も日本企業の海外進出も関係ない、もしくは単にそれに従属したにすぎないものという、ひどく瘦せこけた思想の姿しか浮かび上がってこない。

おそらく思想史研究にも通底するだろうその問題点とは、思想が現代と切り離されていることにある。国民国家や日本社会の連続性という以外の連続性において今なお生き続けているものとして思想を読むことが、行なわれてこなかったことである。

私たちは梅棹が提示した地域研究の方法から離れて地域研究を構想することは、非常に難しいなかに存在している。たとえ梅棹の名を知らなかったとしてもその影響力は、知らず知らずのうちに私たちを縛っているともいえるのである。その意味で私たちは、梅棹の生き、今なお生きている現代、後期資本主義の現代に今なお生きているといわざるを得ない。梅棹とは、対象として十分に歴史化されえる存在には、未だなりえていないのである。

そのことはだが、思想を読む作業全般についていえるのではないだろうか。思想を読むとは、それを客観的な対象としてのみ突き放すのではなく、今なお生きている存在として蘇らししていくことにあるのである。今なお発し続けられている思想の声を、聞き取ることにするのである。そして様々に絡み合ったその声を、国民や社会という概念に従属させることなく、捉えていくことが必要なのである。

だが私たちは未だ、現代という時代を見るための方法を手に入れてはいないし、手に入るものでもないのかもしれない。あくまでそのなかでもがくだけしか方法は遺されていないのかもしれない。必然的に、現在の地点から思想を裁断したくなる誘惑は、絶えず訪れることとなる。

確かに九八年には、「デッサン」でしかなかった自らの「序説」を、ソビエト連邦の崩壊や来るべき太平洋地域の海洋国家連合における日本の役割を予言した書とすることでその可能性の芽をつぶす梅棹がある。⁽⁹³⁾ 鶴見や竹内たちが評価しようとした文脈から遠く離れてしまった現在の梅棹がいる。

だがその梅棹を現在の立場から倫理的に裁断しても、有効な批判とはなりえないことは今まで論じてきた通りである。むしろ私たちに問われているのは、梅棹の残した様々な遺産、私たちが言葉を発し語るときに絶えず関わるその遺産をどのように逆用していくのかということなのかもしれない。「思想を使う」ことを提唱した梅棹を「使う」ことが、求められているのかもしれない。いまま少し私たちは、梅棹というこの迷宮にさまよってみる必要があるだろう。そのなかでこそ、簡単に峻別できない梅棹の危険性と可能性とは、姿を現わすのではないだろうか。

註

- (1) 「汚辱の記憶をめぐって」「群像」一九九五年三月号。
- (2) 「不穏な墓標／「悼み」の政治学と「対抗」記念碑——加藤典洋『敗戦後論』を読む」「世界」別冊六五五号、一九九八年一〇月号。
- (3) 『民主』と『愛国』八二九頁。
- (4) 『民主』と『愛国』八二七頁。
- (5) 『民主』と『愛国』八二九頁。
- (6) 「筆者の著作である前掲『民主』と『愛国』では「戦後思想とは戦争体験の思想化であった」というテーゼを打ち出した。その観点からいえば、清水の著作が「戦後思想」の範疇に入るのかは疑問である。そもそも、彼に一貫した「思想」が存在したのかも疑問であろう。清水は「戦後」を語るうえで欠かせない人物であり、また個別事項としては興味深い存在であるが、上記のような理由から「戦後思想」をテーマとした『民主』と『愛国』には収録せず、別個の論文として公表するのが適切であると判断した。」小熊『清水幾多郎 ある戦後知識人の軌跡』御茶の水書房 二〇〇三。
- (7) 『民主』と『愛国』二二五頁。

(8) 思想を定義し、分類していく分析者としての自らへの小熊の批判的視点の欠如は、最初の著作『単一民族神話の起源——日本人の自画像の系譜』(新曜社 一九九五)の書評で富山一郎が指摘した問題が、未だに引き継がれていることを示している(富山「小熊英二著『単一民族神話の起源』」『日本史研究』一九九七年一月号)。

(9) 『民主』と『愛国』八二九頁。

(10) 歴史学における梅棹の扱いについては成瀬治『世界史の意識と理論』(岩波書店 一九七七)を参照。

(11) マルクス主義歴史学による梅棹の「黙殺」を批判した上山春平「歴史観の模索」(『思想の科学』一九五九年一月号)は、逆に「序説」を歴史認識の問題系のなかに定置させることとなった。

(12) 「アマチュア思想家宣言」(『思想の科学』一九五四年四月号)。

(13) 孫歌『アジアを語ることのシレンマ』一九七頁 岩波書店 二〇〇二。

(14) 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二「戦争が遺したもの 鶴見俊輔に戦後世代が聞く」二〇九―二一六頁(新曜社 二〇〇四)参照。また「大衆路線」期の五四年、『思想の科学』研究会のメンバーであった竹内好は雑誌の目指す方向性についてこのように述べている。

「読者は、この雑誌全体があなたへあてた手紙だと思って、この雑誌をよんでいただきたい。私たち雑誌の製作者は、あなたがた読者とまともに向きあつて話しあう姿勢で、雑誌を作つてゆきたいと考えている」(竹内「読者への手紙」『思想の科学』一九五四年五月号、『竹内好全集』一三卷 筑摩書房 一九八〇。このテキストでの竹内の引用は『竹内好全集』全一七卷(筑摩書房 一九八〇―八二)から行なつた)。

(15) 国民的歴史学運動については遠山茂樹「戦後の歴史学と歴史意識」(岩波書店 一九六八)を参照。

(16) 鶴見俊輔「大衆の思想」久野収・鶴見俊輔・藤田省三「戦後日本の思想」二二三―四頁 勁草書房 一九六六 初版は一九五九。

(17) 「思想の科学」研究会のこのような側面については、安田常雄「民主主義科学と『思想の科学』——戦後思想の思想と方法」、天野正子「民衆思想への方法の実験——ひとびとの哲学」から「身上相談」への位相」(ともに安田・天野編『戦後「啓蒙」思想の遺したるもの』久山社 一九九二)を参照。

- (18) なお梅棹以外には桑原武夫・鶴見俊輔・樋口謹一・藤岡喜愛・多田道太郎が参加していた。
- (19) 青山秀夫・阿部行蔵・岡本太郎・南博「『人間科学の事典』まえがき」『人間科学の事典』。
- (20) 南博「人間科学の立場」『人間科学の事典』。
- (21) 例えば鶴見は「日本の大衆的な思考」に内在する、「お金をかせいで、それから円満な家庭を作るとか、そういうこと以外は、結局重大なものではないので、それ以外のことをかんがえるやつは偽善者」だとみなす「欲望ナチュラリズム」を批判する手段として生活記録運動を設定している(『大衆の思想』一二七頁)。生活記録運動に大衆批判の視座を設定しようとする鶴見の意図がまた大衆文化研究にも通底していることは、『鶴見俊輔集』六卷(筑摩書房一九九一)を参照。
- (22) 「アマチュア思想家宣言」。
- (23) 「アマチュア思想家宣言」。
- (24) 「アマチュア思想家宣言」。
- (25) 「アマチュア思想家宣言」。
- (26) 「アマチュア思想家宣言」。
- (27) 「アマチュア思想家宣言」。
- (28) 「アマチュア思想家宣言」。
- (29) 「アマチュア思想家宣言」。
- (30) 「アマチュア思想家宣言」。
- (31) 『思想の科学』の四十三年間に、創刊号の武谷三男「哲学は如何にして有効性を取り戻し得るか」と梅棹忠夫の「アマチュア思想家宣言」の二つが、そのさし示すコースからしばしばされるこのコースからしばしばされるこの雑誌について今も未来を指さしており、それは梅棹の退会以後もかわらない。『思想の科学』は草野球とおなじ草学問の一つの場であり、それをテーゼとして書きのこしたのが梅棹忠夫である。(『鶴見俊輔』梅棹忠夫頌)『梅棹忠夫著作集』第五卷月報』一九八九年一〇月、後に『鶴見俊輔集』一〇卷 筑摩書房 一九九一、に収録)。

- (32) 「アマチュア思想家宣言」。
- (33) 「本会設立の趣旨」『京都探検地理学会年報』第三輯 一九四二年五月。
- (34) 今西錦司「三ヶ年の回顧」『京都探検地理学会年報』第三輯 一九四二年五月。
- (35) 梅棹「探検と地政学」については山野正彦「探検と地政学 大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向」(大阪市立大学『人文研究』五一巻一二分冊 一九九九)を参照。ただ梅棹の「実証精神」が学問の自由を守るための主張だったとする山野の主張については、私は評価を異にする。
- (36) 小牧実繁「探検と地政学」『地理論叢』一二輯 京都帝国大学文学部地理学教室編 一九四二。
- (37) 梅棹「探検と地政学」『探検』四号 一九四三年一〇月。
- (38) 梅棹「探検と地政学」。
- (39) 梅棹「探検と地政学」。
- (40) 梅棹「白頭山を越えて満洲へ」『京都探検地理学会年報』第二輯 一九四一年五月。
- (41) 梅棹「白頭山を越えて満洲へ」。
- (42) 「白頭山登山行雑記」『今西錦司全集』一卷 講談社 一九七四、初出は一九三五年。
- (43) 「白頭山遠征について」『今西錦司全集』一卷、初出は一九三五年。
- (44) 「白頭山遠征について」『今西錦司全集』一卷。
- (45) 「わたくしはいままででは、探検という言葉よりも、遠征という言葉のほうが、多く用いてきた。その関係であろうか、自分から探検に出かけるなどという、ちょっと気はすかじさを感じる」(「探検の前夜」『今西錦司全集』一卷、初出は一九四二年)。
- (46) 「ヒマラヤ遠征とわが登山界の現状」『今西錦司全集』一卷、初出は一九三六。
- (47) 「一方からいえば、まだ十分な学問的貢献の能力がない青年学徒に対しても、事情の許す限り、探検に参加する機会が与えられなければならない。将来ひとかどの探検家として活躍するためには、若いうちに、やはりある程度の経験と訓練とを経ることが、必要とされるからである」(「探検の前夜」『今西錦司全集』一卷、初出は一九四二)

年。

- (48) 土倉九三・梅棹忠夫「大興安嶺探検の技術面より探検の平常主義と非常主義・合成主義と養成主義」『探検』第三号 一九四三年五月。
- (49) 「大興安嶺探検の技術面より」。
- (50) 「アジア意識と近代化」『芽』八号 一九五三年七月。
- (51) 「アジア意識と近代化」。
- (52) 「プラグマティズムの歴史理論—個人歴史性について」『思想』一九五一年二月号。
- (53) 「アジア意識と近代化」。
- (54) 「生活綴方運動の問題点」(『思想の科学』一九五四年八月)の座談会における鶴見和子の発言。
- (55) 鶴見俊輔「大衆の思想」一一三—四頁 勁草書房 一九六六 初版は一九五九。
- (56) 「二つのアジア史観—梅棹説と竹山説」『竹内好全集』五巻。
- (57) 「二つのアジア史観—梅棹説と竹山説」。
- (58) 「二つのアジア史観—梅棹説と竹山説」。
- (59) 「学者の責任について」『展望』一九六六年六月号、引用は『竹内好全集』八巻(筑摩書房 一九八〇)。
- (60) 驚田小彌太は「序説」が、「歴史的現実の本質は、それが発生した起源にさかのぼってはじめて究明できるとする、歴史起源説」歴史主義に反対しているとする(『昭和思想全史』三三四頁 三一書房 一九九一)。
- (61) 「序説」、引用は『文明の生態史観』中央公論社・中公文庫版 一九七四、初版は一九六六。
- (62) 堀田善衛「日本の知識人」岩波講座『現代思想』一一巻 岩波書店 一九五七年一月。
- (63) 「「序説」が出た五七年は—引用者」社会的には戦後日本の復興が繁栄へのステップを快調に歩みはじめた時期にあたる。敗戦のショックから立ちなおって日本人が「自己証明」を強く求めだした時代である。「文明の生態史観」は何よりも力強い日本人の「自己証明」と読める(『青木保「明るい文明論—梅棹忠夫」言論は日本を動かす』⑨「文明を批評する」講談社 一九八六)。

- (64) 堀田のこの発言は、思想的「デッド・ロック」(「座談会 アシアのなかの日本」『世界』一九五八年五月号、参加者は他に竹内好・石田雄・加藤周一)のなかで語られたものであり、真の意味での梅棹に対する応答は、『上海にて』(一九五九)によって間接的になされていたとみるべきであろう。
- (65) 『知的生産の技術』一二頁。
- (66) 『知的生産の技術』一八頁。
- (67) その点、「企業界・技術界・教育界の多くのかたがたの共鳴」を得て、組織を能率的に運営する能動的な個人を創造しようとした盟友川喜田二郎『発想法』(中央公論社 一九六七、引用は同書まえがきより)と同じ意図をもっていたといえよう。
- (68) このことは川喜田の以下のような発言からも明らかとなる。
 「今西錦司さんをはじめ、私の学問の先達はフィールドワークの道を教えてくれた。知られざる国、知られざる土地にわけ入り、さまざまな見聞から取材する。それらのデータをノートに書きつける。そこまでは先輩たちが指導してくれた。そこまでは先輩たちが指導してくれた。だが、そこから先、それらの渾沌たるデータを、どうしてまとめたらよいのだろう。もう坦々たる道路はなかった。」(『川喜田二郎著作集』五卷五八四頁 中央公論社 一九九六)。
- (69) 『知的生産の技術』四一頁。
- (70) 『知的生産の技術』四一頁。
- (71) 『知的生産の技術』五四頁。
- (72) 『知的生産の技術』一六九―一七〇頁。
- (73) 『東南アジア紀行』一九九―二〇一頁 中央公論社・中公文庫版 一九七九、初版は一九六四。
- (74) 『東南アジア紀行』一九九―二〇一頁。
- (75) 『精神の網』『図書』一九六五年四月、引用は『現代の青春』(旺文社 一九七三)より。
- (76) 『知的生産の技術』六一頁。
- (77) 「戦争体験と戦後体験―世代のなかの断絶と連続―」『世界』一九五六年八月号、引用は日高『現代イデオロギー』

- (75) 勁草書房 一九六〇) から行なった。
- (76) 鶴見たちや日高などによる戦争体験をめぐる議論は、例えば小熊によつては、戦争を知らない世代が増えてきたことによつて戦争体験が失われ、それに伴い戦後思想が力を失ってきたことを示す資料とだけしか読まれていないが、その読みは議論における実践的な側面を全く捨象するものであるといえよう(小熊「民主」と「愛国」五五九―六三頁)。
- (77) 「戦争体験は、ものすごい勢いで腐食しているらしい。腐るままにまかせるのも一案だろう。もう「戦争体験」ということはも廃語にした方がよいかもされない」(竹内「戦争体験」雑感)『思想の科学』一九六四年八月、引用は『竹内好全集』八巻)。
- (78) 「方法としてのアジア」、武田清子編『思想史の方法と対象』創文社 一九六一、引用は『竹内好全集』五巻から。
- (79) 「戦争体験の一般化について」『文学』一九六一年十二月、『竹内好全集』八巻。
- (80) 「民族学と博物館」『図書』一九七四年一月号、引用は『梅棹忠夫著作集』一五巻一〇八頁 中央公論社 一九九〇。
- (81) 「国立民族学博物館の誕生」『文部時報』一九七五年一月、『梅棹忠夫著作集』一五巻一五六頁。
- (82) 梅棹の官僚制に対する評価については岡本太郎との対談「人間の根源的な生命力」『民博誕生』(中央公論社 一九七八)を参照。
- (83) 梅棹「探検と地政学」。
- (84) 「東京でオリンピックがひらかれたのは一九六四年のことであった。つぎは大阪で万国博が開催されるかもしれないというので、わたしたちは模索をはじめた。この話を最初にもつてきたのは、当時朝日放送の広報誌「放送朝日」を編集していた仁木鉄氏と五十嵐道子さんであった。」梅棹「行為と妄想 わたしの履歴書」一九一頁(中央公論社・中公文庫版 二〇〇二、初版は一九九七)。
- (85) 梅棹「行為と妄想 わたしの履歴書」八・九章を参照。
- (86) 「(座談会) 夢はアジアを駆けめぐる 海外へ出かける京大生」(参加者は梅棹忠夫・本多勝一・岩坪五郎・岡崎正

孝・田中琢)『学園新聞』八八六号 一九五七年五月二〇日。

(89) 「経済開発と人類学」『研修』一九六九年二月号、引用は『地球時代の日本人』(中央公論社・中公文庫版 一九八〇、初版は一九七四)。

(90) 小松左京との対談「市民と博物館」『民博誕生』。

(91) 「国立民族学博物館の誕生」『梅棹忠夫著作集』一五卷一五七頁。

(92) 「知的生産の技術」六二頁。

(93) 川勝平太との対談「日本よ、縦に飛べ! — 文明の未来を語る」『文藝春秋』一九九八年八月号、後に梅棹編『文明の生態史観はいま』(中央公論新社 二〇〇二)に「日本文明の未来をかたる」と改題して収録。

(大学院後期課程学生)

SUMMARY

Between “Memory” and “Record”: on the Experience of Tadao Umesao in Wartime and Postwar Era

Shigeyuki HANAMORI

This paper, focusing on Tadao Umesao (1920~), a Japanese anthropologist, aims to criticize the method of the study about postwar Japanese thought, and remap the politics of memory in postwar Japan.

In the study of postwar Japanese, texts having written by postwar scholars, though containing plural and complex meanings, are treated as only materials, from which researchers seem to extract only one meaning.

Principally, I have made clear the complex expression of memory in the postwar text, through analyzing Umesao's two texts, “the Declaration of an Amature Thinker” (1954), and “Technique for the Intellectual production” (1968).

In wartime era, Umesao went to colonies, trust territories and the occupied area of Japan, and those experiences became essential for Umesao's fieldwork tech-nique.

Umesao analyzed the postwar Japanese society by using the same technique in wartime. His memory and experience in wartime were expressed complexly through the presentation of the technique and method of anthropology.

Believing the superiority of technique to thought, Umesao could criticize the contemporary intellectuals. His critique to the authority of contemporary intellectuals is also connected with the critique of colonialism. Accomplishing the critique, he even collaborated with the government and the bureaucracy as if he compensated for the fail of the collaboration with Japanese Empire in wartime.

キーワード：梅棹忠夫，記憶，記録，「思想を使う」